

特集

新潟大学の 日々

～旅立ちの日に～

退任する教員からの メッセージ

学生たちにさまざまなことを教え、多様な研究を続けてきた先生方。
今年退任される先生方に、新潟大学での思い出をお話いただきました。

人文社会・教育科学系



共に学んだ8年

人文社会・教育科学系(人文学部)教授

戸田 光彦 *TODA, Mitsuhiko*

平成11年に企業の研究所から赴任して以来、教育の難しさを体験する教員生活を過ごしました。社会情報論講座／情報メディア論コースや現代社会文化研究科で情報社会や情報システムの授業を担当し、教育を行いながら自身も学び続ける日々でした。学んだ知識がすぐに色褪せてしまう情報化の速さに不平をこぼしつつ。一方で、学生諸君と共に学ぶなかで、「情報社会とはいかなる社会か?」という問題意識に基づき研究を進めることができたのは、人文学部という場に身を置いたお蔭と感謝しています。

平成13年から就職部／キャリアセンターを担当して、学生諸君の就職支援を行ってきました。人材売り手市場のバブル期に

企業側で採用活動の厳しさを味わいましたが、就職氷河期と呼ばれた買い手市場の時期に大学側で就職支援の難しさを経験するとは予想しなかったことでした。そんな状況で前向きに仕事が続けられたのは、キャリアセンターを始めとする全学の皆様にご協力いただけたからだと思っています。ご支援いただいた皆様にお礼を申し上げます。

新潟大学でお世話になった8年は、短期間ではありますが、それまでの人生では学べなかった様々なことを学び経験した、やりがいのある教員生活だったと振り返っています。新潟大学の発展を祈念しつつ、新潟を離れ郷里に帰らせていただきます。

人文社会・教育科学系

新潟大学のシンボルとしての
ファミリー・ツリー

人文社会・教育科学系(教育人間科学部)教授
杉本 英夫 *SUGIMOTO, Hideo*

皆さんは第一食堂前の広場の総合教育研究棟寄り、メイン・ストリートに面したところに家族のように寄り添っている6本のポプラの木立をご存知と思います。5月29日から6月2日まで大学教育開発研究センターで開催されたファシリテーター研究会主催の写真展「ん?写真展」をご覧になりましたか。この写真展の作品の中にこの木立を撮影した一枚の作品(写真)がありました。作品の名は「ファミリー・ツリー」とされていました。出品者は教育人間科学部健康スポーツ科学課程2年生の尾崎常博さん(社会人入学者でジャンボ・テニス・スクール主任コーチ)です。

新潟大学は九つの学部が統合された総合大学です。各学部がそれぞれの自治の下で自由な研究と教育を実践することはそれなりの意義があると思います。同窓会も統合された今、



新潟大学のシンボル・ツリーへ(撮影:尾崎常博さん)

やはりそこに新潟大学として統一された理念とそのシンボルが求められることと思います。尾崎さんの作品「ファミリー・ツリー」は学部間が家族のような絆に結ばれた総合大学を希求した、その表現だったように思えてなりません。

私はこの「ファミリー・ツリー」を温かさと思いやりに満ちた家族のように、自由と平和を基調とした地域に貢献する新潟大学のシンボルとして、これからも皆さんで大切に育てて行っていただきたいと願っています。

人文社会・教育科学系



過ぎ去った年月

人文社会・教育科学系(教育人間科学部)教授
皆川 興栄 *MINAGAWA, Koh-Ichi*

1980年8月、教育学部の「公衆衛生学」の助教授として招かれて約27年。担当学科は、養護教諭特別科、T教授と2人で教育、研究そして管理運営にかかわってきました。草創期の新しい科を、先行する他大学の養護教諭養成を見習いながら、学部の教職員の手厚い支援の下で新潟大学独自のカリキュラムを創り運営してきました。長くもあり短い時間でした。定年退職は人生の大きなターニングポイントですが、現役を引退する気持ちはうれしさと淋しさが交錯します。でもここが引退の潮時かなとようやく覚悟ができました。

研究生活では、数人の別科一期生と一緒にタバコと健康問題を手がけ、それがきっかけとなり、発展し、ライフスキルという健康教育の「核」に巡り合い、喫煙防止教育、薬物乱用防止教育、



定年1年前に、別科生とともに(演習室にて)

包括的のセクシュアリティ教育を手がけることになりました。数回の諸外国の実態調査や10ヶ月間の文部科学省在外研究員としてイギリス・マンチェスター大学そしてアメリカ健康財団での研究は多くの貴重な知見を得ました。在職後半の十数年間は、学んだ研究成果・知見を関連学会、本学や他大学の学生諸君や県内、県外の教育関係者に報告・講義・講演をして来ました。

このような年月を与えてくれた新潟大学内外の諸先輩、教職員、学生諸君の方々に厚く感謝するとともに、皆さまのご健康と新潟大学のますますの発展をお祈りいたします。



退任に際して

人文社会・教育科学系(教育人間科学部)教授
野中 浩俊 *NONAKA, Hirotohi*

昭和48年、芸術系教科の高田分校(現上越市)時代に本学に赴任して、その後、新潟市への統合移転・修士課程設置・学部改組等を経験、34年の歳月が過ぎた。

その間、主として書道実技・鑑賞論を担当し、学生の作品制作の指導に当たったが、今、退任を前にしてあらためて振り返ると、いくつかの困難に遭遇したとはいえ総じて実に楽しく充実した日々であったと感慨一入である。

旧国公立大学の中で「書道科」の設置はきわめて少なく、学生が全国から集まっているのが本学書道科の大きな特色である。また、本学では創立当初から中央書壇との関わりが少なく、独自の教育理念に基づき学生を指導するという伝統がある。このような学風の中で地方大学の特性を生かし、終始、学生との緊密な



学生展での会場風景

関係を保ちつつ制作指導に携わることが出来たのは望外の喜びである。

自らの研究に於いては、個展を主とした作品発表の他に一貫して富岡鐵齋の書美を追い求めたが、この長い道程の中で慈雲や蒼海・米山・八一等、近世から現代に至る多くの秀れた書に接し得たことは、私の生涯への無上の遺産として感謝している。

壽則多辱

人文社会・教育科学系(法学部)教授
内藤 俊彦 *NAITO, Toshihiko*

35年。永かっただろうか、それとも短かっただろうか。始まりは霧の中に芒乎として遙かに消えようとするようでもあり、又、奇妙に鮮明な像を結んでいるようでもある。途中で出会ったあれやこれやの出来事も亦同様である。時間的な距離の感覚が酷く乱れているようでもある。記憶とはかくも覚束ないものであろうか。あるいは、早くも老人性の痴呆現象が進行し始めたのであろうか。

学生部長・副学長を勤めた四年間は無闇に忙しく、解放されてからリハビリに手間取ったけれども、楽しかったという想いが強い。荒川・清水両先生と事務部の方々がとても気持ちよい環境

を作って下さったからである。お二人の温顔が鮮明に心に刻まれている。とはいえ、ここでの記憶も冒頭に書いた心象風景の中に明滅するあれこれの点景である。ある場面は鮮明であり、ある場面は霧の中に霞んでいる。

『莊子 天地篇第十二』に、「天下に道有れば則ち物と皆な昌え、天下に道無ければ則ち徳を脩めて間に就く」とある。私は何時まで経っても「脩徳」には縁が遠いのではあるけれども、此から後は、聖賢の教えを拳拳服膺して、せめて細い煙を立ててひっそりと過ごすことにしよう。

人文社会・教育科学系



退任にあたって

人文社会・教育科学系(経済学部)教授
西澤 輝泰 NISHIZAWA, Teruyasu

私は1981年に電気通信大学助教授から本学経済学部教授に転任しました。私は長岡市の出身ですが、本学教員には高校の同窓生が多く、公私にわたり大きなサポートをいただきました。電通大計算機科学科から本学で経済学部教員に転じ、私の世界は一気に広がりました。様々な社会的課題の根幹に経済学の問題がありますから、私の中に自然にこれらの課題に向き合う姿勢が生まれました。乞われるままに国・県・市町等の様々な審議会・委員会の長を務め、社会的課題に取り組んで来ました。日本雪工学会に加入して「積雪地域経済問題研究会」を立ち上げたり、「にいがたまちづくり学会」の初代代表を勤めたり、「にい

がた緑の百年物語」運動の呼びかけ人となって、これを推進してきたりしました。1996年に新潟県環境審議会長に就任したことを機に、ゼミのテーマを「地球環境問題」にしました。毎年多くの優れたゼミレポートが提出され、学生の優秀さにもいつも感嘆しています。本学は学ぶによし遊ぶによしの絶好の地の利を占めていて、私は夏の休日は海で泳ぎ、冬の休日はスキーをし、春・秋には信濃川べりと海辺をジョギングしてまわり、自然を堪能しています。充実した幸せな26年間で過ごさせていただき有難うございました。

人文社会・教育科学系



雑感

人文社会・教育科学系(経済学部)教授
小沢 健二 OZAWA, Kenji

現社研の発足などにもない、新潟大学に赴任してほぼ15年経ちました。五十嵐キャンパスの木々の成長とともにその季節の色彩が年々豊かになっていることに、この間の年月を感じます。人柄の良い多くの学生との巡り会い、親切的な事務職員の対応など、恵まれた教育環境のなかで時を過ごせたことに心から感謝しています。

とくに、学部で「アメリカ経済論」、全学科目で「世界の食糧・農業問題入門」を担当し、多数の学生を相手に講義できたことは幸せでした。教えることは学ぶことを痛感しつつでしたが、様々

な本を通じて学んだことを学生に伝え、少しでも対話できることは得難い経験でした。

ただ、最近数年間の新大の変化には違和感を憶え、不安も感じます。余裕がない社会状況を反映してのことでしょうか、世の流れに新大が追随しすぎている感は否めません。このまま進むと、大学が際限のないサービス機関、専門学校化する恐れもあります。”文化をじっくり培い、知ることの楽しさを学生と教師が共有する公共空間”としての大学を少しでも大切にしていって欲しい、と心から願っています。



退任に際して

人文社会・教育科学系(経済学部)教授
笹川 壽昭 SASAGAWA, Hisaaki

残すところ2ヶ月余りとなった今の心境は、在職中の39年間は何度か試練はありましたが、良き同僚に恵まれ、思いのままに研究・教育に専念できて幸せだったということに尽きると思います。

顧みますと、新潟地震のあった年(昭和39年)の3月に新潟大学人文学部を卒業し、4年後の昭和43年4月、新潟大学教養部に着任しました。当時、教養部には独立した校舎も研究室もなく、小生は他の5人の英語の先生方とプレハブの一室に仮住まいしながら教員生活の第一歩を踏み出しました。その後、移転をめぐる大学紛争や、平成6年の教養部廃止、それに伴う経済学部への配置換え、最後に独法化と目まぐるしい変化の中で定年を迎

えることになりました。

後顧の憂えなし、と願っていたのですが、近年他大学同様、学内でも英語教育や教員に対して風当たりが強くなっています。

「実用英語」と「スリム化」が強く求められ、それに対応して「改

革」も進められていますが、教育に拙速は禁物です。多少時間はかかっても現場の意見に十分耳を傾けるボトム・アップ方式による改革こそが正道だと考えます。

最後に、在職中の御厚情を謝し、新潟大学の益々の発展を念じつつ、擱筆いたします。



昭和43年11月、西大畑のプレハブ研究室前にて苅部恒徳先生(左)とともに



五十嵐浜を後にする記

人文社会・教育科学系(経済学部)教授
平木 俊一 HIRAKI, Schunichi

実務界から学界に転じたので、当初1~2年間は、担当の国際金融論や金融システム論の一学期15回分の体系だった講義準備で、夜が白々と明けることが何度もありました。それでも実証データ不足、理論武装が不十分のため、数時間後に迫っている授業が不安で、いっその事休講に出来ればと安易に考えたことが再三ありました。それでもドタキャンを一度もませんでした。真面目でした。

教育と研究については、身を持って経験した実務をベースに、しかしそれだけでは無く、一般化・普遍化して、学生諸君に、単なる知識だけでなく、考え方を伝承出来ればと心懸けて来ました。専攻分野の性格上、事実関係とデータは常に最新のものにしていることが、当然のこと要求され、そう努力してきました。さらに実務界の最先端部分に常に関与することで、自分の出身分野(金融)についての陳腐化を回避することでも必死でした。加えて問題意識の多様化の為に、経済産業省、財務省等の中央省庁、新潟県、市、



恒例のゼミ合宿と親睦テニス大会の出発に際し

それらの外部団体の委員会の多くに積極的に参画してきました。この間自分も走りながら学びつつ、その成果を学生諸君に還元もするというのでやって来ました。

しかしながら「至らない点が多かった」というのが、率直な反省であります。

幸い健康にも恵れ、東京の専門職大学院大学への転籍も内定したので、これからもやり残したことを世の中に発表し、間接的ではありますが、新大学生諸君にも裨益出来るものがあればと誓いを新たにしています。多くの関係者に多謝申し上げつつ、松林の向うに佐渡を望見出来る研究室より、私の退任の挨拶とさせていただきます。

人文社会・教育科学系



折角オアシスに恵まれたのに、 絶え間ない技術革新の中にもまれて

人文社会・教育科学系(経済学部)教授
高津 斌彰 TAKATSU, Yoshiaki

夏の朝、体育館裏手の松林から、海岸風致林に向かって、グランド上を20mほどの弧を描いて飛ぶ長い尾のさんこうちょうを見たのは赴任後まもなくでした。自然豊かな我が国でも、後にも先にも一度きりでした。つつどり、おおるり、きじなども見て、新潟はまさに日本のオアシスでした。もっとも、多感な学生たちには、砂漠と映っていたようですが…。

お世話になって早くも39年、世の中は変わりました。新しい学部が生まれて、大学院が発足し、絶え間もない組織改編、カリキュラムの変更が続いています。思えば、情報処理講座の単位を学部で取得してからというもの、黑白写真の現像技術や、コンピューター言語のコボルやフォートラン、湿式コピー機、オリベッティのタイプライター、渡米時のワープロすべてが、身につけたとたんに過



トヨタ自動車会館正面玄関ホールにてゼミの院生と学生とのトヨタ自動車・アイシン精機・デンソー見学訪問

去の遺産になって行きました。

慌ただしくも、刺激的なキャンパスでした。21世紀は技術の発展ばかりではなく、個人の尊厳と創造性の保証、遵法精神、企業統治の再生、各利害関係者の自主性の確立を進めたいものです。今後も新しい大学院大学の〈国際地域企業経営論〉の中で考察してゆきたいものです。大勢の諸先輩、資料室、事務方の皆さんに戴いた暖かな応援に感謝致します。

自然科学系



大学での研究教育生活 30年余りをふり返って

自然科学系(理学部)教授
橋本 哲夫 HASHIMOTO, Tetsuo

京都大学大原子炉実験所から新潟大学に赴任する直前にミュンヘン工科大学に1年間客員研究員として滞在いたしました。その折、私のボスから帰国したら余り人のやってないことを課題にして研究するようにと繰り返し言われました。新潟大学への赴任後、ドイツでのボスの忠告に従い、新しい研究課題に取り組みました。その時以来、白色鉱物からのルミネセンス(発光)測定による年代測定法の基礎と応用研究が30年以上の仕事となり、この分野では世界的にも認められる成果を、研究論文・著書関係の印刷物290編以上として公にできました。それら全ては、研究室で学生や院生および研究生生活を送られた若い人たちの協力の賜であります。関係者の方々に場を借りて感謝致します。

また、新潟大学の教員の方々には、大学発展に貢献するため



「エネルギー・環境・放射線セミナー」の会場での一コマ(2006年11月18日、アトリウム長岡で小・中・高校教職員向けに世話人代表として開催)

学生が勤勉であることを常に認識し、彼らの協力により新潟大学発の数多くの独創的な研究成果を出して頂きたいとお願いする次第です。特に数多くの論文・著作等の成果をと強調したいのは、何事であれ注目度は数に比例すると考えるからです。



40年を顧みて

自然科学系(理学部)教授
増田 芳男 MASUDA, Yoshio

昭和42年の医学部助手を振りだしに、教養部そして理学部と40年の長きにわたって本学にお世話になりました。助手になった直後の大学紛争、昭和46年五十嵐浜に新装成った教養部に移籍して23年間を過ごし、この間に区分制総合大学院自然科学研究科の設置に関わりました。その後、設置基準の大綱化を受けて廃止された教養部から理学部に移って自然環境科学科の新設に関わり、「エネルギー・環境・社会」について考える機会を得たことは貴重な体験でした。そして、最後に国立大学法人新潟大学への大変革に遭遇しました。

この間に大学の「社会化」が進み、ややもすると短兵急な結果が重視され、人材育成についても即戦力を求める風潮が強くなってきました。しかし、若い学生諸君には、広い視野を持ち、目の先のことよりも物事をじっくり観て、よく考え、先を見通す力量を磨いて欲しいと願っています。



研究室の大学院生、4年生とのスナップ

本学の第9代目の学長 茂野録郎先生は
 顔ぶれの 変わりて焚き火 育ており 六花
 と詠まれました。今後は、一市民として大学の発展を静かに見守りたいと思います。

自然科学系



新潟大学への想い

自然科学系(工学部)教授

小林 睦夫 *KOBAYASHI, Mutsuo*

昭和39(1964)年に本学卒業後直ぐに工学部機械工学科の助手として採用され、以来43年間の長きにわたり本学に勤務させて頂き感慨無量の気持ちです。本学に対しては、学生と職員としての二方向からの想いがあります。私の入学時(昭和35年)には、まだ本学はいわゆる蛸足大学と呼ばれ、建物は前身の古い校舎を使い各地に分散し、工学部は長岡にあり最初の1年間だけ新潟で全学部生が学ぶ時代でした。当時はどこも老朽した校舎で、38年の豪雪で長岡市は雪に埋まり、工学部の老朽校舎倒壊の危機を救えとの当時の工学部長の声明により、学生全員で昼は校舎夜は下宿先の屋根の雪下ろし作業にあけた強烈な記憶があります。老朽校舎に対する不満が無いと言えば嘘になりますが、図書館などで勉強する環境などは当時ではさほどの不満は無く、私の周りの学生仲間では、大学で広く深く学びそれを基に国全体の経済成長に貢献したいという気持ちの方が強く、それには全学部が1キャンパスに統合されて欲しいと強く思っていました。一方、当時受けた授業の一部には幼少の頃から物作りにも慣れ親しんだ私にとってはあまりにも初歩的な事柄もあり、不遜の極みで今では恥じ入りますが、授業中に面と向かって不満を述べたこともありました。そのような事もあり、恩師から大学での助手を強く勧められ勤務を決意した際には、教える立場になった時には学生から「そんなこと知ってる」とだけは言われないうにしたいと思いました。

私にとって、恩師の乱流熱伝達研究の実験・計算の手伝いと電子計算機の大学への導入が勤務開始の年でもあったので、電子計算機の利用は重要でした。しかし、初期の段階では、離れた長岡からでは手回し計算機や電卓の方がターン・アラウンド上で有利になり、ミニ・コンと称する16Kバイトの計算機が工学部に導入される頃には、その能力不足などで悩まされ、漸く工学部がこの地に移転する時期には、インターネットが整備されはじめ、離れた距離は全く無関係になるという皮肉な苦勞も致しました。これらのお陰で、コンパイラーなどの解説をしたこともあって、専門外であるコンピュータのハードとソフトにもかなり精通することができたつもりですが、現在の自動車と同様に今使っているパソコンの中身について基本的な事は知ってはいても、その詳細は全くといって良いほど分かりません。

このように、研究理論と技術の急激な進展が、それらに対してその先端にいる人だけにしか知りえない状況にさせつつあるとき、研究者や技術者の倫理が強く要求されます。本学は、私の学生時代の不満のほとんどは解消され、理想的な環境に整備されつつあります。学生諸君には広い見識を本学で身に付けて頂きたいものです。最後に、先輩諸氏と皆様のご厚情に感謝し、本学の大学大競争時代の勝ち抜きのために、微力ではありますが今後も何らかのお手伝いをさせて頂きたいと願っています。





研究・教育冥利に尽きる大学

自然科学系(工学部)教授

山口 貢 YAMAGUCHI, Mitsugi

博士課程を修了後、26年間の会社での研究開発、11年間にわたる大学での教育・研究を振り返り感無量である。特に大学は研究・教育冥利に尽きる。両者を同じ土俵で比較することはできないが各々が名実ともに機能分担を明確にしてその使命を果たすことは極めて重要である。会社における研究開発では、スケジュール、研究資金、研究テーマには当然厳しい制約があり、且つ利潤を追求し自活していく必要がある。他方、大学ではそのような束縛はなく自由闊達に旺盛で独創的な研究活動を展開できる。会社では多くの優秀な技術者がグループとして機能し潤沢な研究開発費のもと先端的な研究開発を遂行できるが、大学は付属研究所などを除けば殆どが数人もしくは個人プレーに負う所が大きい。また、学生も貴重な戦力であるが教育が主眼であり数年で代謝することになるので技術の蓄積と向上を図ることは困難である。従って、一部の例外を除けば大学での研究は研究者一

個人の極めて優れた頭脳に依存していると考えられる。

しかし、昨今、教育・研究において大学の発信が弱く、社会からの外圧に左右され独自性が喪失しつつある。社会から遊離した閉鎖的組織は論外であるが余りにも一方向に振れているのではないのでしょうか。日本の大学はアメリカの教育・研究・管理運営を全面的に受入れ今でも追従することなのでしょう。

基礎を教育できるのは大学であり、一方、目先に捉われない研究が望まれると共に大学は発明の宝庫で社会に非常に貢献できる。学内外に氾濫する意味不明の米語(ホワイトカラー・エグゼンプション、バウチャー制度など)、主客転倒しがちな境界・複合領域、故意に複雑にせざるをえない組織、社会に阿なければならぬ教育と研究、管理運営などと課題も多いが、もっとも誇りを持ち自信を回復する事が重要と考える。



新潟大学を退任するにあたっての思い

自然科学系(工学部)教授

関根 征士 SEKINE, Seishi

私が生まれた年の1941年12月8日、日本海軍が真珠湾を奇襲攻撃して太平洋戦争が始まりました。当時の日本は、中国、朝鮮(今日の韓国と北朝鮮の地域)を侵略して台湾と朝鮮を植民地にしていました。しかし、1945年に天皇主権の大日本帝国が崩壊して植民地は解放され、1947年に国民主権の日本国憲法が施行されました。それから今日までの60年間、一人として戦争による犠牲者を出していません。それは憲法第9条があるからです。ところが、昨年12月、日本国憲法の理想の実現は教育の力にまつべきものであるとして制定された教育基本法が改定され、国家による教育介入の歯止めが取り払われました。また、本年1

月に防衛「庁」が「省」に昇格され、安倍首相は年頭会見で「ぜひ憲法改正を目指したい。」との決意を表明しました。これは「自衛軍」(自民党憲法草案)をもち「戦争しない国」から「戦争する国」への転換をめざすものです。

新潟大学では、1987年、教職員の過半数署名により「新潟大学非核平和宣言」を制定しました。宣言は「戦争や軍事を目的とする教育研究を拒否し、科学・技術・文化・芸術の固有の発展をめざし、研究・教育・医療が平和と人間の尊厳を守り、社会の発展に寄与するよう務めます。」と謳っています。これが私のコンパスであり、座標軸です。

自然科学系



退任するにあたっての思い

自然科学系(工学部)教授
安東 政義 ANDO, Masayoshi

私が、新潟大学工学部に赴任してから、18年間で過ぎようとしています。現在、ドラフトチャンバーを備えた広い実験室と居室、機器類の充実、博士課程前期および後期の学生定員の確保と充実した教育研究環境で仕事をやらせていただいております。癌の化学療法と関係深い、①抗炎症剤、②制癌剤、③耐性癌に有効な制癌剤の開発の研究で、成果をあげる事が出来ました。その要因の一つは、学術振興会の、2名の外国人特別研究員のグループへの参加(2001-2003年)と日中科学協力事業共同研究(2003-2005年)への採択です。これにより、中国研究者の研究能力と質の高さを実感しました。またこの期間(2000-2006年)に9名の博士課程の学生に恵まれました。大学での自然科学系

での研究の担い手は、博士課程後期の学生であると思います。生理活性試験は、三菱ガス化学新潟研究所、癌研究会の御協力をいただきました。三菱ガス化学の長谷川俊明さん、東京工業大学の片岡孝夫先生、中国科学院薬物科学研究所(上海)の李娜博士、中国医科学院薬物科学研究所協和医科大学(北京)の戴均貴副教授、チチハル大学・化学と化学工程学院、院長張樹軍教授と分野の違いや、国の違いを越えて一緒に仕事をする事ができました。最後に、良い教育と研究の場を与えていただいた新潟大学に感謝をすると共に、本大学がさらに発展する事を祈って本文を終らせていただきます。

自然科学系



新潟大学を退任するにあたっての思い

自然科学系(農学部)教授
楠原 征治 KUSUHARA, Seiji

当時、新潟市小金町にありました新潟大学農学部に着任して以来、37年の歳月が流れ、この3月末に大学を去ります。「教えることは学ぶこと」を実施しながら、学生諸君と充実した時間を過ごせましたことは、何者にも代え難いことです。

この37年間、農学の一部門として畜産学の教育研究に携わってきました。畜産は家畜を飼育して人の生活に役立つ物資を生産し、その利用をはかる産業であり、畜産業は1960年以降著しい発展を遂げ、肉類、鶏卵、牛乳およびそれらの加工品によって日本人の食生活の改善を図ってきました。一方、畜産学は家畜の改良、繁殖、飼育と、その食品の並びに経済的利用についての理論と応用を対象とする学問分野として、畜産業とともに発展

してきてきましたが、近年に至って、生命科学という学問分野が急速に進展し、畜産学にはこれらの分野を包括した新たな方向への指向が現れました。慣れ親しんできた畜産学科という名称も、1990年代に入って40校余の大学からほとんど消え、新潟大学農学部においても学科の改組で名称が変わりました。消えたというよりも、畜産という文字の変わりに、生命、生物、動物、資源、環境などの単語群に科学をつけて、新しい学科やコースの名称を作り上げました。学科やコース名は変わるべくして変わったのかもしれないませんが、21世紀の農業はもちろん畜産の行方を暗示しているように思います。



新潟大学を退任するにあたって

自然科学系(農学部)教授
鈴木 敦士 SUZUKI, Atsushi

私が農学部畜産学科助手として小金町の木造校舎に赴任したのは1971年9月のことでしたから、すでに35年が経過した事になります。月日の経つ速さを実感しています。

農学部は1974年に五十嵐地区の新校舎に移転し、総合大学の一員として発展をとげてきましたが、校舎の老朽化とともに私も年を取り定年を迎えることになりました。

赴任当初、卒論学生が滞留しているような研究室でしたが、少しずつそれも解消され、備品も整備されました。博士課程設置後、博士の学位取得者(論博2名を含む)が10名に達し、その中の留学生3名は母校に帰って助教授として活躍しています。

卒業論文で「筋肉タンパク質に関する研究」の手ほどきを受けて以来、博士課程、米国留学中、新潟大学赴任後も首尾一貫して「筋肉から食肉への変換機構を筋肉内在性タンパク質分解酵素の作用」という観点から研究し、かなりの成果をあげる



卒業祝賀会にて

事が出来ました。1989年からは、「超高压処理による肉質制御」という課題も加わり、退任後も本学に於いて新たな展開が期待出来そうです。また、学部の垣根を超えて活動してきました「新潟大学地域連携フードサイエンス・センター」が2007年度概算要求項目として採択されたことを大変喜んでしています。

35年6ヶ月の長い間大過なく過ごす事が出来た事は、多くの教職員の方々のご助力の賜であり、厚く御礼申し上げるとともに本学及び農学部のさらなる発展を願ってお別れの言葉と致します。



ひとすじの道

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授
杉山 博信 SUGIYAMA, Hironobu

新潟大学に1997年に着任しましたので、3月で丁度10年がたちます。早いものです。前任大学での在職期間26年を合わせると、36年になります。一貫して、水文・水資源工学にかかわる研究・教育に携わってきました。

その間の社会の変容は激しく、それに伴い大学のイメージも大きく変化しました。当然、水文・水資源工学に向けられた社会的な要請や期待も変化しましたが、今も昔も、「水の循環を科学する」ことを目標に掲げて、「ひとすじの道」を歩き続けてきました。

30余年間、すばらしい恩師の知遇や仲間の援助を得て、フィールドで水の循環を視る感性を研ぎ澄ますことができました。とりわけ、



集中講義終了後の集合写真(JICAにて)

本学に着任早々、新潟県北に設置した試験流域を舞台にした野外セミナーやフィールドワークは、教育・研究活動の忘れがたいものとなりました。

本学での研究・教育活動は、楽しい思い出が多く、新潟を離れても、それは折にふれて浮かび上がってくることでしょう。

最後になりましたが、お世話になりました皆様方、ありがとうございました。

医歯学系



コロンブスの卵へのチャレンジ

医歯学系(大学院医歯学総合研究科(歯))教授

川島 博行 KAWASHIMA, Hiroyuki

アメリカ大陸を発見したことに対して、「そんなことは誰にでも出来る」といわれたコロンブスは、「それなら卵を立ててみる」とチャレンジし、誰もが試みて出来ないのを確認した後に、卵の尻(底)をつぶすことによって立てて見せた、と言われている。だが真相は、卵を立てることができた者に教会建築を受注させてはどうかと、同時代の建築家ブルネレスキが提案し落札して見せたのを、コロンブスの伝記を書いたベンゾーニが流用したということらしい。以来「コロンブスの卵」といえば、誰にでも可能なことではあっても始めて実行するのは難しいものだ、という意味で使われている。しかし、無傷の卵を立てることは不可能なのだろうか? 遠い昔の少年時代、私もそのように疑ったことがあった。当時日本は貧しく、卵をオモチャにして遊ぶなど許されることではなかった。時が過ぎて、たまたま読んでいた本に、卵は立つ、とさりげなく書いてあった。思わず本当かと叫ぶほど興奮したが、多忙で試みる間もいままさらに時が過ぎた。本学に赴任して数年経過したある日、市場で買って来た卵を並べて見ているうちに、卵の形にも個性があるのに気がついた。そのとき突然上記の本の記憶が甦ったのである。対称性が高く重心の安定しそうなものを選んで試みたところ、果たせるかな、数分の後に卵は見事にテーブルに立ったのである。もちろん、これは生卵、すなわち、生きている卵だから、一度重心が安定してしまうと、そう簡単に倒れないことも確認できた。大きな振動を与えない限り終日立っている。可能とわかってしまうと、かなり歪(いびつ)な卵でも立てられるようになった。まさに、コロンブスの卵、である。写真は、研究室の机に立てた時のものだ。ゆで卵が立ち得ないのは明らかだが、生卵が立ち得ることをコロンブスあるいはブルネレスキは知っていただろうか? いずれにして

も、「コロンブスの卵」の意味するところは不滅だ。学生諸君には、「常識を疑う」柔軟性と「独創的発想」を可能にする真の学力を身につけるよう心がけてほしいと思う。

11年の在職期間を通じて直接・間接にご支援下さった関係各位、また、学生・院生の皆さんに深謝いたします。長いことお世話になりありがとうございました。



スチールの机上に立つ生卵



医歯学系



人と人との繋がりに感謝

医歯学系(大学院医歯学総合研究科(歯))教授
野田 忠 NODA, Tadashi

昭和54年、37歳で歯学部小児歯科の教授になりました。子どものむし歯の洪水の時代でしたから、そんな年齢でも教授になりました。それから28年、昔大騒ぎで治療した子が、子どもを連れて診療室に来るようになりました。これは新潟のありがたいところで、人と人との繋がりが、地域全体を包み込んで、それが年月を経ても続き、さらに広がっていきます。教養でやっている『食べる』という科目では、食の陣代表の本間龍夫さんや伊藤文吉北方博物館長など、新潟で次々に広がる人脈のお陰で、講義に魅力が出て学生の支持を得ました。

37歳の若造の教授は当然のように学生担当となり、全学の会議では各学部の同じような人たちと顔見知りになりました。その



講義「食べる」の実習にて

人たちと一緒に歳をとり、歯学部病院長や旭町分館長になったときも、評議会など大学トップの会議でも、気軽に本音で話し合えました。

新潟大学の28年間、数多くの人と出会って、多くのものを貰いました。特に学生さんとのいろいろな出会いは、彼らに思い出を残しているかどうかは分かりませんが、これからの私の人生の大きな支えになるでしょう。

人文社会・教育科学系



サーフィンのはてに——大学改革への反省

人文社会・教育科学系(大学院実務法学研究科)教授
山下 威士 YAMASHITA, Takeshi

ドイツでの在学研究から帰ってきた直後に、小島康裕法学部長から、大学設置基準の大綱化に即応する抜本的な将来構想の検討を命じられました(1990年4月)。鯨越溢弘、葛西康德教授らの優秀な若手を集めて、徹底したブレインストーミングを行い、基本的な戦略図を構築しました。この検討の際に、私の提出した唯一の要求は、「自分の入りたい大学、学びたい法学部を構想せよ」でした。スーパーと同様で、「店員が、自分の店で買い物をしたくないような店に、誰が買い物にくるか」という発想です。この戦略図に従って、全学的には、武藤輝一学長の下で、現代社会文化研究科・博士(後期)課程の新設、商業短期大学部や教養部の改組へ協力し、法学部については、全国唯一の法政コミュニケーション学科・研究科や、社会人教育のための「夜間主コース」を新設しました。このような改革は、やがて荒川正昭

イラスト:『法学部案内1995年版』に掲載の
学生が書いてくれた法学部長としての私

学長の下で『学際的基幹大学としての新潟大学』(グリーン・ペーパー、1999年1月)としてまとめられました。このころの私について、「文部省の課題という波に乗って、サーフィンをしているようなもの」という某学部長の名(?)批評もいただきました(新潟日報編『大学が地域を変える』1997年、78頁)。

かくして行き着いた先が、独立行政法人化の現状とは。もちろん、これは、私どもの努力であるよりも、国家の基本的な文教政策のなせることではありますが。現状は、絶望的に困難に思えます。しかし、私どもの改革は、どんなものにせよ、自由作文ではなく、多くの条件の下で行われる課題作文です。どんな困難があろうとも、新潟大学の、優れた方々が、必ずやその能力を発揮されて、将来への道を示してくださると期待しております。